

子供の上手なほめ方・叱り方

—— 小学生の場合 ——

河 合 冬 樹

船橋市立西海神小学校

1. はじめに

小学生といっても幼稚園を出たばかりの1年生から中学生になろうとする6年生までその発達段階の差は、一言ではいい表せないものがある。その中でも特に高学年の児童は、どのようなほめ方によって行動が意欲的になったり、継続したりするのかまた、どんな叱り方が自己反省を促し行動をやめさせたり、見直させたりするのかについて今までの実践の中から述べてみたい。

2. ほめる・叱る前にまず人間関係を

子供との間に人間関係ができていない場合、どんなにほめても、どんなに叱ってもその効果が期待できないことがある。特に学校では、教師と子供との間に信頼関係がないとかえって逆効果になってしまうことさえある。したがって、私たちは、ほめられて嬉しいと子供が思えるような教師でなければならないし、叱られていけないことをしたなと子供が素直に思えるよう、子供との間に信頼関係を築いておかなければならない。

3. 個に応じたほめ方・叱り方

子供たちは、一人一人個性や生活経験が違う。同じ学年の子供でさえこれらが違えば当然、ほめ方・叱り方も違ってくるはずである。学級の中には、叱られ慣れた子もいれば、甘やかされて育った子もいる。これらの子に同じ方法ではめても、叱って

もみんなが同じように動機づけされたり、反省するとは限らない。やはり、教師が子供一人一人の性格、欲求等を考え、個に応じた接し方をしていかなければならない。

4. 子供にあつたほめ方

(1) 何のためにほめるのか

私たちは、子供がよい行動をとったときもしくは、とろうとしたときにその行動をその子に継続してもらいたい、次もそのような行動をとってもらいたいと思ってほめる場合と学級や学年の子、場合によっては全校生徒に知ってもらふことにより他の子にもその行動をまねしてもらいたいと期待するときにはめるのである。したがって、教師のねらいによってほめ方にも違いがあるのは当然のことである。

前者は、みんなの前ではめる場合もあれば、その子だけにはめる場合もある。しかし、後者の場合は、みんなの前ではめるしかないのである。ところが、子供によっては、みんなの前ではめられるのを嫌う子もいる。そこで、子供のほめ方を次のように分類してみた。

分類Ⅰ：みんなの前ではめるか、一人のときにほめるか

分類Ⅱ：名前を公表するか、しないか

分類Ⅲ：口で言うか、文字にするか

分類Ⅳ：報酬を与えるか、与えないか

分類Ⅴ：すぐほめるか、しばらくしてからほめるか

(2) 子供のほめ方

分類Ⅰ～分類Ⅴを組み合わせるといくつかのほめ方が考えられる。これらを組み合わせたものと子供の性格、欲求等を考え、この子には、どのようなほめ方がよいのかを学級の子供一人一人について考えてみた。

高学年の場合、男女の差によっても違いがある。特に女子の中には、思い込みで一人がほめられるとみんなはどう思うかなど余計なことを考える子もいる。このような子にとっては、そっと本人だけにノートにでも書いてこちらの気持ちを伝えてあげたり、名前を出さずに行動だけを紹介するなどしている。また“AさんとBさんとCさんが”のように複数の子供をほめる場合にはみんなの前ではめても気にしないようである。男子の場合は、このような心配もなくほめる内容やその時の状況に応じてほめている。

また、報酬については、高学年になればなるほど言語による報酬が効果的である。特に、女子は男子に比べて言語報酬が効果的であり、それもみんなの前ではめるよりも個人のノートに書いてわたすのが有効であった。(但し、これはあくまでも私の実践の中での話であり担任が男か女かベテランか新米かでも違ってくるであろう。)

また、しばらくしてからだれだれ先生がこうほめていたというほめ方もしたがあまり効果がなかった。しかし、そこに一言、担任の気持ちを伝えるのと伝えないのでは、子供の反応が違った。

子供を上手にほめるとは、子供の欲求を見抜き子供の個性に応じたほめ方をすることである。

5. 子供の叱り方

子供の叱り方もほめ方と同様、分類Ⅰ～分類Ⅴにあてはめることができる。叱る理由の軽重にもかかわるが、私は、次のことを叱るときのルールとしている。それは、①命にかかわること以外はみんなの前で叱らない。②みんなの前にだすときは、名前を公表しない。③罰を与えない。④その場に自分がいあわせた場合には、すぐに叱るが、人から聞いたことについては事実関係を明らかにしてから叱る。⑤子供の人格を傷つけない。⑥叱った後は必ずコミュニケーションをとる。また、叱る場合の口調であるが、人の命にかかわるときには荒々しくなるがそれ以外は、頭ごなしに怒るのではなく、子供の話を聞きながら子供自身が本当に悪いことをしたなもうこれからはしないようにしようと思うように説き伏せている。また、子供がしてしまったことを自分から言いにくてくれた場合には、よく正直にいつてくれたね。この次からはしてはだめだよぐらいにとどめている。また、子供が自分のしてしまった過ちを言えない場合は、時間をかけていえるように手紙を書いたりして心が開けるようにしてきた。

6. 家庭との連携

子供がしたよいことについては、家庭にも連絡をして、家でもほめてもらうようにしている。またその時のほめ方なども親の方にあらかじめ伝えてある。また逆に、悪いことをした場合には、連絡すべきか否かは、その軽重によって判断しなるべく子供の口から報告させるようにしてきている。